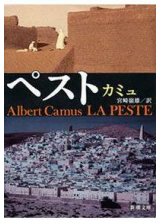
アルベール・カミュ『ペスト』



「コロナ･ショック」で図書館が休館であり､新聞もチェックできない。カミュ『ペスト』を久しぶりに読もうと、書棚を探したが見つからない。本屋で探したが、よく売れているのか棚にない。そんなとき、朝日新聞 3 月 25 日朝刊「文芸時評」に目がとまった。作家の小野正嗣さんが伝染病・震災・戦争について語るなかで、『ペスト』が出てくる。抜粋して紹介したい(写真はネットから)。

新型コロナウィルスの世界的な感染拡大によって僕たちの日常生活にも大きな制約が生じている。どうしても伝染病や戦争など災厄を主題にした文学作品に目が行ってしまう。いま、フランスの作家アルベール・カミュの傑作『ペスト』を読んでいる人は多いのではないか。フランス植民地下のアルジェリアの町オランに謎の熱病が発生する。主人公の医師リウ―はそれが何かすぐに気づき治療に奔走するが、当局がこの病気を「ペスト」と認めるのは、おびただしい数の死者が出たあとである。「ペスト」が宣告されるや、オランの町自体が「隔離」され、住民は一種の「監禁状態」に置かれる。日常生活は完全に麻痺する。海水浴が禁止され、あまりの死者に葬儀すらできない。閉鎖された家屋が略奪・放火される。この光景には奇妙な既視感を覚えはしないか……。

極限状態に置かれた人間の絶望やおぞましさを示すそうした細部を描くために、カミュが参考にしたにちがいない本がある。デフォーの『ペストの記憶』である。デフォーといえば、誰もが無人島の漂着者『ロビンソン・クルーソー』を思い出すだろうが、この世界文学の必読作家は、1665 年にイギリスで大流行し、膨大な数の死者をもたらしたペストについての架空の記録文学を残しているのである。架空というのは、原著の刊行が 1722 年であるように、このペスト禍をデフォー自身は経験していないからだ。その時期にロンドンに暮らしていたという人物が語り手となり、自身を含めてこの疫病に翻弄される人々の姿をいま目の前にしているかのような筆致で報告する。

行政による強制的な隔離、感染者の監視、死体の処理などの施策、失業者の増大による経済の停滞などが統計を援用しながら巨視的に描かれると同時に、大挙して地方に逃れる人々、病魔に蝕まれ悲惨な死を迎える病人たち、感染の危険にもかかわらず買い物に出かける市民の姿が等身大で描き出される。そうした行政と個人のふるまいはときに恐怖を、ときにおかしみを感じさせ、災厄に直面した社会の混乱が伝わってくる。

武田将明氏は「訳者解題」のなかで、行政の発表する数値に一喜一憂する市民の姿、ペスト感染者(被災者)に対する差別や受け入れの拒否、風評被害など、デフォーの描く 300 年前のイギリス社会が、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災と原発事故のあとの日本社会の光景と重なると指摘している。

‥‥　爆弾や放射能やウィルスだけではない。無関心や忘却もまた人間の自由を奪う恐ろしい災厄なのだ。

(2020 年 3 月 30 日)